

2023.02.24

「中国がロシアに武器提供」発言の意図は？

ブリンケン米国務長官が「中国がロシアに武器提供を検討している」と発言した背景・理由について遠藤誉（中国問題グローバル研究所所長、筑波大学名誉教授）が発信しています。「(そのような発言は)ゼレンスキーが中国を警戒する原因となり得るからだ」というのが結論ですが、「アメリカは常に停戦させない方向に動いてきた、」という開戦以来の流れ・事実を列挙し、明確な論拠を示しています。

以下、ポイントのみ紹介しますが、ぜひ[遠藤誉自身の論考](#)をご一読ください。

◆ゼレンスキー大統領、初めて中国に警告

・もともと中国とウクライナは非常に仲が良く、プーチンがウクライナ侵攻を始める寸前まで、緊密な関係を維持していた。ウクライナ戦争が始まってからも、中国の立場（軍事的には侵攻に賛同しない）を「中立」とみなして、ゼレンスキー大統領は中国を高く評価する傾向にあった。

・今年2月18日、ドイツのミュンヘンで安全保障会議が開催される中、アメリカのブリンケン米国務長官が「中国はロシアに武器の提供を検討している」と発言し、大きな問題になった。

中国はすぐさま否定。「武器の提供という意味では、アメリカほど戦場に武器を提供している国はなく、そのようなことを言う資格はない」と強く反発。

Q なぜブリンケンがこのような発言をしたのか？

A ミュンヘン会議後のゼレンスキーの言葉から推測できる。

・「もし、中国がロシアと同盟を結ぶならば、第三次世界大戦が起こるだろう。中国はそれを分かっているはずだ。」

(もともと、ロシアに対する中国の軍事援助の兆候は見られないが。)

ゼレンスキーが中国に「警告を発する」類の発言をしたことは初めてのこと。

ブリンケンは何を言えば、ゼレンスキーが中国を最も嫌うかを心得ていたのだ。武器を中国がロシアに提供しているとなれば、王毅がミュンヘン会議で伝える「習近平の提唱する和平論」には絶対乗らないだろう。ブリンケンの発言は、習近平の唱える「和平論」にゼレンスキーが乗らないようにするためだったにちがいない。

◆アメリカは停戦になりそうになると、必ずそれを阻止してきた

Q なぜそのような推論が成り立つか？

A ウクライナ戦争を通して、アメリカが如何に「停戦」をさせないように動いてきたかを見れば一目瞭然。時系列的な図表を作成してみた。

「停戦」に関する米中ウ（米国・中国・ウクライナ）の言動。赤色で示したのは、アメリカが「停戦させまいとして動いた言動」を指している。

No.	日時	停戦に関する米中ウの言動
1	2022年2月25日	習近平がプーチンに話し合いによる解決を呼びかける。
2	2022年2月25日	プライスが「停戦交渉のオファーなどは無意味なので受けるな」と発言。
3	2022年2月28日	ベラルーシ国境付近で第一回和平交渉。
4	2022年3月1日	王毅がクレバ外相と通話し、「話し合いによる解決」を呼びかける。
5	2022年3月3日	ベラルーシ国境付近で第二回和平交渉。
6	2022年3月7日	ベラルーシ国境付近で第三回和平交渉。
7	2022年3月10日	トルコの仲介で、露ウ外相がアンタルヤ外交フォーラムで会談。
8	2022年3月14-17日	トルコの仲介で、第四回和平交渉がビデオ通話で再開。
9	2022年3月17日	プリンケンが「中国がロシアに軍装備品の支援を検討している」と発言。
10	2022年3月21日	トルコの仲介で、ビデオ通話で第五回和平交渉。
11	2022年3月29-30日	トルコのイスタンブールにおいて第六回和平交渉。
12	2022年4月4日	王毅とクレバ外相と通話し、「話し合いによる解決」を呼びかける。
13	2022年4月20日	トルコ外相が「いくつかのNATO加盟国が戦争が続くことを望んでいる」。
14	2022年4月24日	プリンケンとオースティンがウクライナを訪問し、戦争の継続を激励。
15	2022年5月25日	ゼレンスキーがダボス会議で中国の現在の政策に満足していると発言。
16	2022年7月22日	ロシアとウクライナがトルコ及び国連と穀物輸出協定を締結。
17	2022年8月4日	ゼレンスキーが取材で中国の習近平との「直接会談を求める」。
18	2022年9月22日	王毅とクレバ外相と面会、話し合いによる解決を呼びかける。
19	2022年9月26日	ノルドストリーム爆破(米ジャーナリストが犯人はバイデン大統領)。
20	2022年11月14日	ゼレンスキーがG20サミットに合わせてビデオ演説、「米中が一致して核兵器使用の脅迫は容認できないと強調したことは重要」と発言。
21	2023年1月18日	ゼレンスキーがダボス会議の記者会見で習近平国家主席に会談を要請する書簡を手渡したと発言。
22	2023年2月18日	王毅とクレバ外相が面会、「話し合いによる解決」を呼びかける。 王毅がミュンヘン安全保障会議で演説し、1周年に合わせて中国は「ウクライナ危機の政治的解決策に関する中国の立場」を発表すると発言。
23	2023年2月18日	プリンケンが中国がロシアに兵器の支援提供を検討していると発言。
24	2023年2月20日	バイデンがウクライナ訪問、ウに追加支援、露に追加制裁と発表。
25	2023年2月20日	ゼレンスキーが中国がもしロシアと同盟を組めば、第三次世界大戦が起きると、初めて中国に警告を発する。

遠藤誉 作成

2022年2月24日にプーチンによるウクライナ侵攻が始まると、その翌日の25日に習近平はプーチンに電話し、「話し合いによる解決」を呼びかけた (No.1)。

プーチンがそれに応じようとする、アメリカのプライス報道官が「停戦交渉のオファーなど無意味だ」として、ゼレンスキーに「騙されるな」と警告 (No.2)。

それでもベラルーシ国境付近で第一回の和平交渉が始まり (No.3)、少しずつ進み、3月10日から舞台はトルコに移っていったが (No.7)、3月17日にプリンケンが「中国がロシアに軍・装備品の支援を検討している」と大々的に言い始めた (No.9)。「停戦だけはさせたくない」と思ったからではないか。その証拠に、2022年4月20日にトルコの外相が「いくつかのNATO加盟国が、戦争が続くことを望んでいる」と発言した。(No.13)

基本的にゼレンスキーは中国に対して好意的で、中国に警告を発するようなことをしたことがない。ところが、王毅が、「和平案」をウクライナ戦争1周年に合わせて中国 (習近平) が発表すると言った瞬間、プリンケンはやもや「中国がロシアを軍事的に支援しよう」と

している」と発言した。(No.22)

両者に共通するのは、「停戦が進みそうだ(進むかもしれない)」というタイミングである。ということは、アメリカは「停戦させたくない」と思っていることの論拠になり得る。

現時点では誰もプーチンの狂気を是正させることはできない。ならば、せめて、ウクライナへの果てしない武器支援が、結果的に侵略を激化させ、ウクライナの庶民の命を奪っていくことにも目を向け、停戦に向かわせていく努力をするしかないのではないか。

そうでなければ、日本は台湾問題により第二のウクライナとなり、アメリカの餌食になっていく。

絶対に戦争をやめさせようとしないアメリカは正しいのか！？

[comment]

そもそも米国大統領に、このたびのウクライナ侵攻を未然に防ぐ意思があったのか？

[「ロシアがウクライナの国境周辺で軍を増強させ緊張が高まる中、アメリカのジョー・バイデン大統領は\(2021年12月\)8日、ロシアが侵攻した場合に米軍をウクライナに派遣することは検討していないと述べた」事実](#)、(バイデンは前日7日、[プーチン大統領とビデオ会談](#)したが、一貫してNATO不拡大に関するロシアとの対話には一切応じなかったという事実)などから判断しても、本気で侵攻を防ごうとしなかったことは明らかだと私も考えています。

そして、中国(習近平)との電話会談やトルコの仲介で「ウクライナ中立化」、「ロシア軍撤退」という線で停戦が実現しかけた矢先に、「ウクライナへの戦車提供を検討する」とバイデン大統領が表明したことについては、強い憤りを覚えたものです。

遠藤誉がまとめたように、米国が一貫して長期戦をあおっていることは明らかでしょう。ロシアによる侵略を「成功」に終わらせてはならない。これは言うまでもありませんが、他方、米国による代理戦争が「成功」してさらに長期化すれば、何が起こるでしょうか。(ウクライナ人に戦わせ、米国兵士は一兵も失うことなく米国軍需産業・シェールガスの業界が莫大な利益をあげている)。米国が中国を挑発し、[「台湾有事」の「代理戦争」に台湾と日本を巻き込む可能性](#)は、遠藤誉や私の杞憂ではないと考えるのですが…。